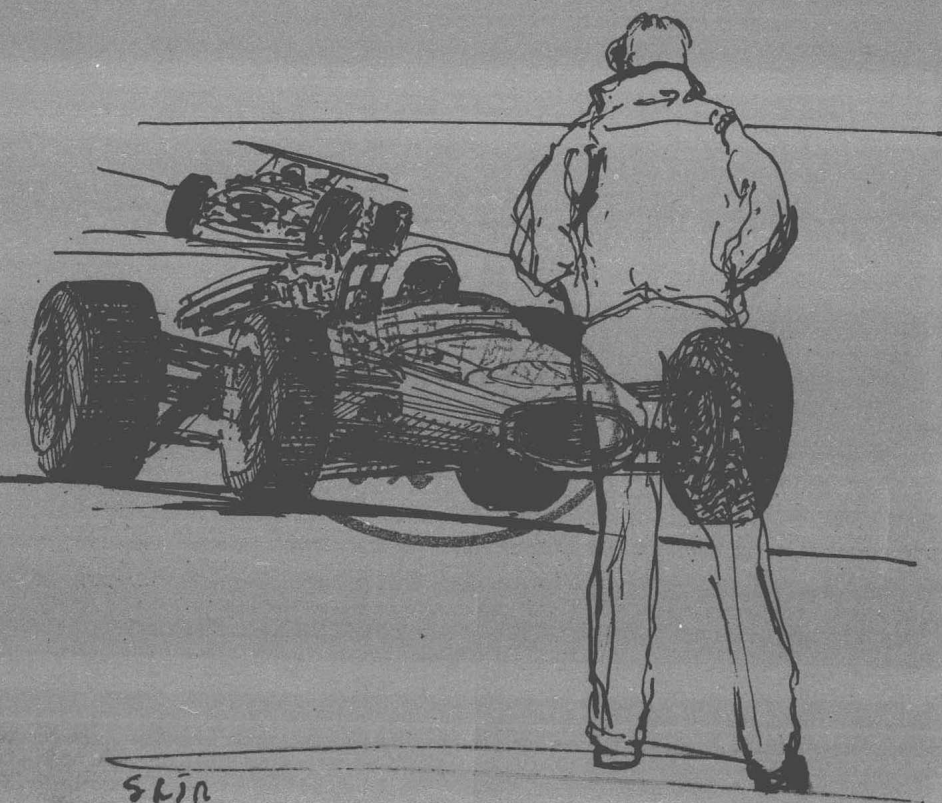


清水一行

西の神話

西の神話



西の神話

1969年9月24日 第1刷発行

著 者 清水一行

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(942) 1111 (大代表)

振替 東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

定 価 350円

Printed in Japan © Ikkō Shimizu 1969

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

(分) 0-0-93 (製) 123338 (出) 2253 (0)

目次

西の神話

5

爪牙の跡

61

拾った怪文書

131

喝しの筋立

187

装
幀
片
岡
眞
太
郎

西の神話

西の神話

一

初め孝子は「わたしにはもうとでもついていけません」という言い方で切り出したが、やがてすべてを清算したいと言い、更に自分の言葉に昂奮して「あなたは冷たい人でエゴイストだ」と、高原克彦を罵った。

痛烈な、野獣の爪を思わせる孝子の言葉を噛みながら、自分の女を奪おうとしているのは一体誰だろうと、こめかみ顚顚を痙攣させながら高原は考えた。

——そうか、あいつだ。川上が盗もうとしているんだ。

ついてゆけないというのはい逃げで、本当はほかの男が好きになったからだと高原は怒りに震える指先で、もてあそ玩んでいたホープを灰皿で思いきりねじり消した。

三ヵ月程前、宇品港に面した完成車用テストコースの端に車を寄せ、海を見ながら、完成車検査課のテスト・パイロット川上浩司と、愉しそうに話しあっていた孝子を、高原は自分の所有物に無断で触れられる思いで眺めた。

その後も、肩を並べて工場内を歩く二人の姿を見ている。

「川上さんレーサー志望なのよ。でも一流のレーサーになるには、とてもお金がかかるんですけどね」

高原が聞いたわけでもないのに、孝子からそう打ち明けたことがあった。

「かっこいい男の子になりたいのか」

そのとき、吐き捨てるように言った高原の言葉を、孝子は詰る眼差しで見返した。それ以来高原はつとめて川上の存在を無視し、孝子との話題から抹殺してきていた。

ところがいま、その孝子が自分との関係を清算したいと言い出した。当然新しい恋人がいるはずだし、その場合に相手としては、あの男しか考えられなかった。

瀬戸内海に漂う無数の島々に守られた宇品市、その北東部に展開する資本金三百億円、年間売り上げ二千数百億円という山陽自動車で、創業者社長田島周重の絶対的な信任を背景に、社内でもトップのエリートコースを確実に歩いていると自負する高原にとって、孝子の変心は、まったく信じられぬことであった。

信じられぬというより、絶対に容認できぬ許すべからざることである。

——前途に見込みのないレーサー志望の男に。

「やっぱり川上なんだろう」

「え！」

「新しい君の恋人さ」

高原のその嘲るような言い方に、孝子はきつと、姿勢を起こした。

「高原さん、あなたには結局わかってもらえないんだわ」

「なにが……。ぼくになにをわかっていうんだ」

「もういいわ。わたしの気持はすっかり話したつもりよ」

高原との交際にすでに三年以上の歳月を傾け、すべてを許してきた水谷孝子にとって、それは固い決意であつた。

机に散らかつたコンピュータカードに肘を突き、高原が口をつぐむと、向かいあつた二人の空間に忽ち息苦しい沈黙の壁ができる。孝子は身じろぎもせず、じつと高原の出方を待った。

すでに重役は一人残らず退社しているらしく、コンピュータ利用の幹部位置標示灯のランプはすっかり消えていた。孝子は急に周囲の静寂さが気になった。やがて午後九時になる。コンピュータールーム別室という、高原のプライベート・ルームで、二時間以上も議論をつづけていたのだつた。

「ぼくとしては困るね」

しばらくして高原は吐き捨てるように言った。

「困る？……どうして」

「君と別れる理由がない」

「愛情がなくなつたというのに」

「それは君の勝手な口実だろう」

「勝手な口実なんて……。愛情ってお互いのものでしょ」

「じゃいままでの、ぼくと君の体の関係はどうなるんだ」

あけすけな高原の言い方に、思わず孝子はひるんだ。別れようというのだ。清算したいと頼んでいるのである。体の関係はどうなると聞かれて、果してそれに答えなければならぬのだろうか。

「ぼくと別れたって、君の体が急に綺麗になるものでもない。ぼく達の関係、みんな知っているんだからなあ……」

「わたしのことはわたしが考えます」

孝子は蒼白な顔を上げて答えた。

「とにかく出よう。ぼくは疲れているんだ。どこか静かなところで話をしよう」

「わたしはもう話すことなんかしないわ」

「じゃ、ぼくには考える余裕もくれないっていうのか」

不意に高原は語る口調が変わって言った。もちろん一方的な通告だけで済む問題ではないことはわかっていた。どんなことがあるうと高原とは別れたいという孝子の決意は固かったが、高原に得心してもらうには、当然或る程度の話し合いが必要だったし、三年もつづいてきた関係であってみれば、喧嘩別れにだけはしたくない。それは孝子の感傷というより、孝子の負目であった。全てを許しあったという事実にたいする女の弱味である。

殊更な誇張を交えて、高原にそれまでの関係を吹聴ふいちやうでもされたら、或いは会社を辞めなければならなくなるかも知れなかった。

「いいわ、でもどこへ行くの」

「宇品山へ登ろう」

「こんな時間にいやよ」

「こんな時間って、いままでは何度も夜中に登ったじゃないか」

「でも……」

「静かなところっていったらあそこしかない。それに……」

言いかけた高原は、孝子の表情を窺い、ふっと言葉を飲んだ。

朝から一日中降りつづいていた雨も上がって、闇を切るヘッドライトに浮かぶ宇品山の雑木は、白い滴の花を飾っていた。

ハンドルを握る孝子の横顔は固い。

別れ話の末、市内でも夜のアベックの名所と言われる宇品山へ登って、高原がなにをしようとするつもりなのか、それを考えたと孝子の気は重かった。だが、宇品山へ登ることを結局承知してしまった悔恨や、山頂へ行ってからの不安とは別に、ハンドルを握る手だけは、別な生き物のように鋭く躍動した。

かなり勾配の急な坂道を上がっているのにこの山陽自動車は総力をあげて完成したグレート・エンジン車スワローは、駆動音もすくなく、滑るように疾走してゆく。

宇品山は、宇品市と山陽自動車の中間、二つの川にはさまれて工場の背に当る場所に位置し、

昔は城が築かれていて、その城跡の頂上にいまは電波塔が立ち、瀬戸内海と宇品市を一望の下に見降せるところから、小さな土産物屋もあって、昼は市民の憩いの場になっていた。

頂上までの道は完全に舗装されていたが、幅は三メートル足らず、ハンドルを一駒間違えば、崖を一挙に転落する危険もある。グレート・エンジン車スワローは、雨上がりの狭道を、時速六十キロ以上のスピードで上がってゆく。五百二十cc、ツィ・ローターのスワローだが、並みの千二百cc級乗用車をはるかに凌ぐ力感があつた。

スワローを駆る孝子の運転技術は確かだった。

山陽自動車の女性テスト・パイロットとして、工場の完成車検査課に所属し、ラインから組み立てを終えて流れ出てきた完成車を、宇品港に面した直線一キロ足らずのテストコースで試乗し、トラブル箇所をチェックするのである。孝子のような女性パイロットは、山陽自動車に四名いたが、経験がものをいう仕事だけに、二十五歳の彼女が一番若かった。

助手席で、リクライニングのシートを倒し気味に坐つた高原は、緊張した固い孝子の表情を窺いながら、いつしか吸いこまれるような、孝子の運転に陶酔を覚えていた。

——三年前、あの山頂でこの女はおれのものになったんだ。

高原は後れ毛のかかった孝子の艶のあるうなじを見つめ、いま、不意に孝子を失ってから不自由さを感じた。

そのときの孝子は、高原に自分の運転技術をひけらかしたいという意図で、同じ漆黒の山頂へ迫る狭道を、いま以上のスピードで走り上がった。初めて乗せられた孝子の大胆な運転に、秀れ

ているとか上手だと感ずる以前の不安を、山頂に着き、軽く汗ばんで微笑した孝子に、当然の代償として高原は迫った。

闇の草むらでの葛藤であつた。孝子にとってそれは予想もしなかつた帰趨であり、それだけに激しく抵抗した。だが、声を出して助けを求める決断のつかぬまま、強引に唇を奪われ、更に組み敷かれて有無を言わず高原の女にさせられてしまった。

「ひどいわ……」

終つてから、横坐りに高原に背を向けた孝子は顔を覆つた。

「どうしてこんな野蛮な……」

「そのつもりだつたんだらう」

軽いあざけりをこめて高原が言う。

「ま、処女でなかつたことは確かだ。もっとも二十二歳で処女のはずがないな」

泣く声も飲む思いで、孝子は体を硬直させた。まさかそんな言い方を……。

「泣くなよ。別に純潔を失つたつてわけでもないじゃないか」

衣服を直し、黒い影のように立った高原は、孝子の頭上で煙草をくわえ、悠々とライターを鳴らした。その微かな火に浮かんだ自分の惨めな姿に、弾かれて孝子は身をすくめる。

——冷酷なひどい男。

暴力で奪い、さらに足蹴にする言い方である。孝子は高原を恐いと思つた。

「こんどいつ会う」

「え！」

「明日は忙しいから、明後日にしよう」

奪い、自分の女にしたという、頭ごなしな迫り方だった。孝子はなぜか逆らえなかった。逆らうのが恐かった。忌わしい思いをふり捨てるように、孝子の白い手が山路の急なカーブに合わせ、踊る敏捷さで廻った。

車の運転技術は、まず必要な装置を覚えてどうにか動かすことのできるのが初歩、危なげなく街を走れば普通といわれているが、テスト・パイロットのテクニックは、当然その上でなければならぬ。車を完全に制御し、自在に操ることであった。

孝子の運転は、掌の玉を転がすようで、意のまま車が操られている感じだった。

だが、考えてみると、今夜の孝子は、高原と息詰まる別れ話を交した後であり、普通の状態ではないはずだったが、微塵も隙のない運転をつづけている。

高原にはそれが驚きでもあり、同時にセックスとは異質な魅力でもあった。

高原克彦の仕事も、コンピューターという非人格な機械が相手である。そして自分は複雑なそのコンピューターを自在に操っているという自信を持っていた。

やがて車は宇品山頂に達し、電波塔の真下、小さなグラウンドもある広場に着くと、孝子は山陽自動車の組み立て工場を真下に見降す一角で、サイドを引いた。

「ここじゃなく、もっと海寄りの方がいい」

高原が言うと、孝子は鋭い拒否の視線を返した。